どうかで、

対立した。

網野はこれ

まで単

な

か。

な進

0

追求

中で切り落とされ、

見

逃さ

てきた世 歩

界

0) 0)

中

下から、

人類の経験と叡

抵 市

なくてはならないと強調した。

未来に生かす

課題を歴史学は

負 面

的

代 派

0)

質的

生

一産力の発達がそのまま歴史の

進

歩

か 純

擁護

か

E

民

0)

生活より優先しているの

では 利

論会

史遊』

を読んで

通

7

いる。

今の

H 部

本は、

官

僚

機構

0)

n

会

場

史学として網野善彦と永原慶二は、

史遊会通

NO. 177 行 発

Fi. 演 要 旨

沂

制 0)

松

111

博

光

テー

7 演

漢詩の

方

講

鯨游

海

氏

会

場

H

黒区

民

セ

ター

階

社会教

育館

第2研

近 主 年では 環境悪: 義 成 が 長期 心化問題 地 般 球温 的風潮であ までは、 暖 か 化 クローズ・ 近代科学万能 経済の った。 グロ 史

近

は進 では、 バル化、 既に産業革命以 行してい 無差別爆撃による大量殺人を行っ 世界同 た。 第 時 後 不況に 次、 人間による自 第二次世界大戦 直 面 してい 一然破壞 る。 物 た

主義 全体を見ない、 して 自然との共生を考える必要に迫られてい 強調 沂 進歩であるという考え方は破綻をきた 0) 代文明の 代至上主 弊害を生 る 8 あり、 0) は、 進 __ to 展 明らかであ 志なかばで終わっ は 物質的 人類 のエゴイズムが 合理 史 生 0) 化の弊害、 産 一力の発 環として、 てい まか 官 僚

活論と共活 経 抗 民社会派社会科学も、 験 から、 戦後民主化推進とマッチし 通 性があっ H 本帝国 た。 主 alej 戦 義 者 0) 前 M は 戦 は 争 体 0) 肼 座

平成21年 6月8日

\$ 務 局 3 03--3712 0651 下山田方

例

숲

0)

お

知

5

せ

0

6

例

日

時 月

平

年

6

24

日

水

後 成

6 21

時

8 月

T 坂 自 由

0)

諸

締切り

6

并 新

執筆

は 漢詩

高橋

曲

貴

彦

井宏

船 作り

村徹先生

讃

歌

0 月 例 会

H 時 平 成 21 年7 月 22 H

後 6 時 8

社会教育館 H 黑区 民 セ 1 第2研 ター

会 森下征 Ш 喬 央 氏

可 討

自 征 由 執筆 一は島 諸 津隆 締 切 n 8 相 月 原 15 精 H 次

0) いう点で合意 徹 底 あっ 的な民主 が あ 去する為に、 上主義化 n 後 民 近 代化 政 主 主 治 か 思 必 社 会

あっ 口 多くの同世 でくるという方法であっ たのは、 " 後日 展望を叙述したと認識し た社会状況と取 18 歴史と向 1 バー 近 両 代が 者 本 かし からその 一代人によって支持され 0) 伝統の 思想状 かい合うことが戦 ル の方法上 限界を迎える。 クスとウエー 0) か組 エッ 清算とその 況にお 0) た。 むため 相 セ 違 ン 61 て最 を ス バ へを取 後日 7 成 理 闡 0) 1 63 深果を 『者は た立 選択 iv を重 b り クスと 本 L 有 かで、 確認 J I た上 込 場 0) ta 力

1 大塚史学は ノス近 て説きあ スに 原 人 北求め 0) 化 経 探求は 3 近 か 0) 済 とい 代 L 動 祖国日 た このイギリ 国 因 を 家 3 を樹 歴 貫 本 建 史 0 0) 寸 制 た論 ス近 民 基 た典 主化 底 代 対 理 か 5 型 0) 化 主 構 成

内

田

善

彦

は

大塚

久雄

0)

77

I

1

解

釈

証してきたが

九 1

八三 バ

年

0)

最 を 月号

であ と。 する をも 後まもない 経 は 13 た。 H 進 つまで 済の学問水準から大きく遅れている。 何故ダメなのかという話ばかりしてい 日本の学者は 本 に役立 大塚史学の日本分析 英国 批判 つ たら 0) たが 知 たっても 0) が L 的 0 た日 頃 H 風土として定着 と信じら はある種の 本 市民社会派の社会科学で 角山 -研究者口 口 封 ンドンまで来て、 会の 栄「大塚史学との 建 的であるとか 絶対 ナル は国際社会の比較 前 近 近 L 代 的 K 代 化 な知的 的 11 要 侵 西 日 1 素 略 欧 アは に対 闘 権 H 本 あ 戦 化が 戦 3 本は つ 威 争 63

である て見直 王 であり、 判 本武之輔 を 0) 阻止 家総 和平 を 昭 道 和 徳的 せ 動 交 きた」 ば 員 涉 生 期 佐 0) 体 産的でない 歴史形 制 数 情緒的 多 藤 面 元英 玉 12 々、 春 お 性 ける科学 13 が 成 対 $\overline{\circ}$ 米開 と思 見ら を諸 東 おこなっ 郷外 改 0 j. 要素の 造 九 戦 n る。 相 年 技 п 避の可 特に中 ても は 術 累 月 戦 九 H 0) 号、 四 米 重 積 前 能性 不毛 開 視等 国 とし 0 0) 2 批 宫 戦 年

を

使っ

てい

を馬

権

運

動

家

民

権

か

玉

権

1

13

ないかと

13

読

4

方

が

問

わ

れて

て不

安の影を見出

してい

た人物で

主

義で

あ

が、

沂

代世

界

0)

7

た。

まさ

諸君

平成

4

年五

月

臨時

增

H

前

0) 1

> 内靖 大塚系譜 に満ちたメ 講義で、 M ウェ か タモ 5 近 代 0) ーバ 決別 ル 主 フ 1 0) 才 か 5 門 葉で 近 ゼ 代批 をとげ あ 波 判 新

幡神社 か H 風 た 資 か っているうちに、 昭 か 制 和十 ムに馬 媒社 本の大陸侵略を合理 のです。 料に物を言わ 批判をしてい ねなかっ れましたよ。 大阪の守 城 0) Ŧi しかし 大井 年頃、 社 城 台 た。 屋 前 典 憲 0) 郎 福 せて 郎 る。 太郎 大井 力 姿を見せ Ш 自 を使 ムフラ 島新 平 分の言葉は 幼方 は 言 野さんが 経 伝 済学 吾 用 化する役割を果たし 城 初 13 Í 直 は たいことを書 Ш 期 馬 と言 出 者 0) 吉 昭 使わ 身 益網 1 城 傑作な本を書 和 7地の字: 稿 に止 大井 あなたが入 中 戦 0) ない のペ 勤 国 前 その まら 研究 伝 80 期 、ンネ 佐八 か ず 題

成 文 6 命 や土 みれ 0) 明 つ 題で従 開 条件であっ 由 地平 化 ば 民 来考えら 玉 13 この 分法に 会開 不平等条約改 た。 命 題 n 2 は 大井 憲法 は 7 成 13 たが り立 0) 制 IF 評 0) 5 諸説論争 定 価でい ため たない は 近 文 は大 代国 0) 明 とい か 史 観 形 玉

化していったのです。

(福田

和

也

一日

起

民主主 と評価する学説も有力な時期があ 豪農主 一義運 動ととらえ、 土 0) 地平分法を土地革 自 由 民権 大井をロベスピエ 運 動 本語 をブル 命 ジ 0) 理 Ξ

会は西ヨー

・ロッパ

近代社会を理想化したフ

田洋の解説によ

れば、

日

0)

市

民

社

農派も日 日 としての日本の近代化を把握できなかった。 を批判する足場であると指摘 ィクショ (アンドリュー 本の社会科学」NTT ンであって、 本資本主義 E 0) バーシェイ、 日本社会の非近 動態を、 出 講座派 まさに全体 近代 代性 労

ジョアジーとか、 イギリスでもフランスでも |義体制を樹立したブルジョア革命とか 義思想にもとづく行動主体としてのブル ギリス人歴史家ジェ 彼らが主導し、 フ・ 存 1 在しなかっ 1) 自 1 由 は 民 自 た は 主 由

戦争、 憲法制定により近代的国民国 明 E 動によっ 由 (望田幸男「ふたつの近代」 ナリ H 民権運動によっ 七年の民選議院設立建白書にはじま 「露戦争といっ 愛国 ズ ハムが て芽生えた国家意識は、 主義的なナショナリズムに 生 まれます。 7 た大国との対外戦争 日 一家を目 本にあらたな 玉 朝日選書 会開 指 日清 す政 設

0)

判 史像を構築する妨げとなるばかりでなく 観によって歴史を考えることは 的な偏見まで踏襲して、 0) 本 価 による歴史解釈 中に身 0 値 西 断を下すことを不可能にする。 欧的 近 の多元化し 近代化をモデルにして、 た世界情勢の中で、 0) 新 生を終えていると云える 追求が続く。 潮新書 E | 大井はこ 口 E ッパ Œ 適応努力 近 中心 代化 正し D L " 63 歴 0) 史

か

7 近代史の中の豪農は 独立 自 」営農 民 と日 大塚史学の 本の 豪農 いう を比 E

中

〈実である。

形は多様であ

ŋ

複

雑に交錯した近

代化化が

認 自 曲 執 筆

知 考古学 に つ 13 7 の 一 考 察

中 Ш 喬 央

演の する新たな動きがあり、 には認知考古学という、 因 理 最 案内 する心理 解 近 状 脳 何を付け加えるのか?」 いが舞い 神経科学は政 面 から 込んだ。 問題 人間 それに興味を持ち 0) 治 たまたま考古学 学 解決を図ろうと の脳 社 とい 会的 0) 働きに 5 行 動

極分 較 本家に転 H L 化 本では 寄生 する 0) 地主と小作 資 は 本主 部であっ が 進 成立 展ととも 産 工業資

農村工 発展 二本足の工業化があった。 化を支えたのは、 定着させる方式である。 糸 財 政を支える地租を負担 日 業の大群である。 本 物に 業として発展しており、 たものと、 0) 資 よる外貨獲得 本 主 義 西欧の 伝統織 がは後 豪農たちは 進 し、 産業を日 物を代表とする 織物業、 国 型近 在 貢 献 輸出 来 明 産 代 産業 新政 治の工 業基 とし 本に移植 製糸業は た 府 が 生 0)

ることにした。 本 更にその学問を日 直 子 准 教授とも 面 本に導入し か あ 7 た岡 た 0) Ш 大 加 松 す

学院法学· で講演後の懇親会会場で、 考古学と通ずる点があると判 1 面 一談し、 X 会は盛況で、 を岡 彼女の了解をとっ Ш 政治学研究科 講演 松本准 0) 内容 教 授宛郵送 7 も子 講演者の東大大 加藤淳子 断し 想通 当 た。 日 0) n 認知

考古学は当 初 ヨー 口 " 15 で、 中 近 東 I

ようになる

としてスター 型式学に 空間的 体 系化 重点を置 0) 真 による文化 た。 偽 É を D その 判 ーマ等 考古 定 後 0) する為の古 流れを重 資 料 の時 心物や遺 た美 視 1 的

+

1

L

る文明 進化に対し 一些 間 式による型 はモンテリ ここで日本考古学に 的 個 18 々の 0) ター 空間 発 いての豊富な知識 遺 展 P 的 物 ュウスの 変化 独自 0) 具体 化 0) の考古学的視点を持 チャ 技術 大きな影 伝播 総体として構築され 的 個人と社会 形 的 10 態よりは 重 を基にし 11 発 一展と退 一点を置 響を与えた K そし 哲学 その た心 63 た 0)

学界の を中心とし その れるも を中心とした型式学的 が起こる。 変革 た新し を求めるニューアー 九六〇 これ い考古学方法論が確 は 年 この プロセス考古学と 考えは 技 入るとアメリ 術的 ケオロ 研究に基 1 T 呼 paron 力 D

より

得ら

n

た仮説

的

E

11

XX

米

古学

12 九

おける中

心的な存

在の

つと 学が

13 准 方一

九

0

年

代に

入ると認知

考古

族学や

い方法による分析結果とを

なる。

この動きは主としてプロセス考古学

れまでの

文化

歴史主

的

照合して、 たも 0) であっ 該期の社会や文化 復 兀 しよう

其 多系進化論と文化生 は 91 文脈 方で、 プロ 的 (集落配置様式) 機能 セス考古学の 現代経済 的ア 一態学、 済学 プロ Amount È への関 セト チ、 システム な要 il 文化 民心であ 素 メント とし 進 化論 7 n

ンピュー こうした動きのなかでビンフォ 般 理 夕技 と考古学的データの間 術等の影響を受け てい 0) ギ 1: た。 to " 13 プ

を埋 領域 ところが一九八〇年代に 80 る為 理 論 ニドル 構築の考えを打 レンジ to セ 出して オリ A いる 中

> たことである 論や方法、

考え方が適用できるようになっ

入るとプロ

to

ス

界

古学のアプロ セス考古学がスター 唯物論的であると Descrip チを、 する 批 機能 判 主 義的、 た ポ ス 1 生 態

される性別 なわちジェンダー 人類学の研究動向から るとしたうえで、 木 ター 為者などに は 人類学も考古学と が対して 権 力 社 米のプロ 会的 1 乖離して久し イデオロ 、関心だと批 文化的に セス考古学 ギ 13 関 評し 13 連 構造 形 か 成 t が あ

す

心

能動的 ス学派が用意した、 者による、 動として な個人に焦点を充てる事などの ポストプロ 意味や、 セス考古学に対 14 イデ ポストプロ オロギ する セ

史的考古学者が利用 0) 性 (認知心) ここで考慮すべき事柄は 発展によって、 重要な基礎としたものであ 理学、 認識 できなかった新し 九六〇年代以 人類学、 認知言語学等 知 前の文化 理

とによって、 や衰退という現象の中で、 であるという視点から、 3 0) 現 的な働きをしたのだとい んでいる。 八類の進: 0) 在認知考古学者 情報と行為を仲介す が認知考古学であ 化、 全く新し 結論をい 社会の 14 複雑 61 うなら る根 歴史観を築こうと 様々な問 う認識に立 人間 間 化 ば、 本 0) の認知 文化 的 到 これ 題に取り プロ 知 か 発達 セス か n 中 外

0) 組

認知考古学 教授 こう 0 分野で した背景のも か らも 進 更なる情報提供を求められ 展 も認知 のうえで 研 究 朗 我国 か 報 始 まっ 13 あ お n 松本

法隆寺の再建の謎

自

由

執

筆

(聖徳太子信仰

隆恵

みも は高野 て敬 一人に共通するの 大師 あまねく人に慈悲の心で接し は元を辿 我 気愛され 救ってくれると言うイメー の二人がその双璧であろう。 が Ш 国 の修験僧 れば官製の偶像であり、 の歴史上 続 17 た人物に は 千年以上の長 Ш 伏) は 仏 0 教 製の偶像であ 聖徳太子と弘 えを通じて ジである。 如 きに 聖徳太子 何なる悩 弘法大師 日

叡山 安時 に依 う聖 n 室 再来像が るようになっ 町 时代には れば 時 階級を中心にその信仰が浸透して 延暦寺 一徳太子信仰に発展して行く。 代以 後 降になると 0) 0) 玉 聖徳太子建立の四天王寺 国家鎮護 霊場となり、 浄土宗や法華宗 たとある 0) 最高 般 この観音菩 の寺院である比 庶民にも信 に吸収さ ものの 行き 仰さ n 薩 Y 本

2

国宝釈迦三

尊像

現在夢殿に安置され

を 持ち 大な政 にある。 聖徳 治家であるだけでなく、 此太子信 その記 教の教えに通じていて寺院 仰 録によれば 0) 起 源 は H 聖徳太子 木 聖 書 人の 紀 0 0) 14 建 徳 記

> に聖 族 が殲 徳太子 8 人受けする要素も 滅滅さ 努め た仏 人気 れるという悲 0) 秘密に、 兼ね 劇 者としてあ 没後に 備 0) える 主人公と言 故 る。 なく 5 更

> > できた

(-)N 問 題 H 提 K 0) 特 别 番 組 法 隆 寺 0) 謎 0)

旨を簡単にご紹介する n 1 あり、 今春 隆寺 全焼の記録は、 A 0) 以 大変興味深い番組 七〇年に全焼した。 聖徳太子が建立したとさ 下 焼け具合から真実と分 0 以下 その規模はやや小 NHKで「 旧法隆寺)は、 新法隆寺)のやや その寺院跡 法隆寺 だっ 創 場 建当 振 たので、 0) いりであ 謎 かっつ から n 所 る法 か 初 出 斜 現 0 が 法 7 放 在 隆 1 た。 の趣 の法 映さ 前 隆 寺 た 13 寺 は

聖

一徳太子は観音菩薩の生まれ変わり

と言

子の 分か 0) 7 面 仏像は いる の人 7 た。 物だった。 国宝救世観 体は建立当初の物 聖徳太 身長 子 音像 1 0 等身 0 セ 大を と判 及び ンチ は模し 国宝 明し、 0) 大 た物と 柄 玉 で細 虫 体 厨

(3) 六六七もしくは六六八年 は 現 存 0) 金堂 # 裏 以 0) 屋 根 K 板 0) 現 年 建立とほ 金 輪 0) 鑑 0) E 定 建 で、 断定 1 時

(4) 安置 0) 期まで、 0) べて安置され 制作年 移 現金堂の 動時 仏 像 期 代 0) 世 釈 が は 痕 てい 鎌 迦 観音像と玉 跡 倉時 現 か たと確 尊 在安置されている仏 5 代 像 なので、 建 0) 立山厨 認できた。 寸 隣 時 0) 基 子 か 鎌 が 5 壇 倉時 12 あ 体 残る 3 像 並 時 体

その

謎解きは

概

ta

次

0

通

りで

あ

7

た。

そのやや奥 堂に安置 現金堂は、 旧法隆寺の全焼 が地の L てい 旧 Ш 法 を削 た 隆 前 寺 0) か 焼 て新たに建立さ 5 失の二年前 記 体を

完成した。 に数多くの堂舎が増築され、新法隆寺が の一全焼後は、焼失を免れた現金堂を中心

(D) (C) その後の としたものだ。 命令者 現金堂 相 え 声は大きく、 天智は 出次ぐ失 で宥め は 唐の 建 政 時 7 百 倭 と全 0) 済 围 再 権 玉 れを 豪族 力者 侵 興 焼 略 0) 0) 後 たち 統 軍 天智天皇であっ 0) 聖徳太子 0) \$ 新 法隆寺 作 に役立てよう 0) 防塁費用など 不 戦の失敗と 満と怨嗟 の仏 再 建 た 0)

この当 一系列で簡単に整理してみる。 一時の政治状況を、書記の記録によ

百済再興のための大軍事作戦 白村江の役で敗戦 か

六六八年 六六七年 新法隆寺の現金堂完成 近江遷都

唐の将軍郭務宗が二千名余の

軍

六六五年 六六四年

唐使劉徳高が筑紫に来訪 唐使郭務宗が筑紫に半年

在

留

六七〇. 年 旧法隆寺全焼

を伴い筑紫に駐

年 一月 の軍を率いて筑紫に駐 再度、郭務宗が二千名余

留

一年五 十二月 月 天智崩 天智崩御を筑紫で勅

使か

五月 報告を聞いて郭務宗は帰 壬申の 乱勃 国

八月 天武即位

持統即位

役で大敗してからの天智は、 七二〇年 この時系列で推理できる事 九州から大和までの防 日本書紀完成 唐の倭 は、 衛拠点造り 白村

玉

侵 江

略

0)

に近くて危険な飛鳥を捨てて、

より安全な 陸地の難波

当時の人たちの約六十年前の昔に活躍し

更には敵軍の想定上

近江に逃げ、 敵軍 の唐の筑紫国 0) 占領

現実の問題となってしまう。

六四五年のクーデター(乙巳の変)で実

その度重なる戦費の負担に喘ぐだけでなく、 倭国の存亡の危機を招いたのである。 んで大国の唐との大決戦に挑むも惨敗し、 百済は滅亡するだけでなくその再興を目論 権を握った天智の終生の百済支援戦略は、

をしたのか 誰が何を狙 11 新法隆寺建立

1 誰が建立をしたのか

家でなければ財政上不可能である。 たのは天智天皇である。 これほどの大規模な寺院の建立は、 法隆寺に隣接して新法隆寺の建立を命じ 即ち、 天皇

天武と持統がその大半の堂舎建設を命じた ぼ一年後には崩御してしまうので、 旧法隆寺は全焼してしまう。 のであろう。 そして、現金堂が完成した段階でなぜか その天智はほ 後継の

2 その狙い は何だったの

が薄弱である 玉 NHKの推理 一しようとした)だけでは、 (聖徳太子の仏教の教えで

根拠

とする。

子の政治の助けが良かったからと言う事は 古事記の厩戸についての唯 た厩戸皇子 お前達若い者も聞いておるよな」に象徴さ 推古女帝の長い治世は、 (聖徳太子)についての意識 皇太子の厩戸皇 の記 録である

れているように思う。

と度重なる遺隋使派遣と隋の答礼 厩戸の良き政治とは、大国 0) 中

围

隋

使節の訪

並びに文化の交流で倭国が飛躍的な繁栄を 成し遂げた業績を指したのではないか。 倭という平和友好関係の構築により、 経済

再 建

且つ膨大な戦費負担で豪族たちの経済的な

上に強大な唐と軍事衝突をして大惨敗し、

それに引き換え天智の行った事は

隋以

破綻を来すだけでなく、更には倭国が史上 寺の現金堂が完成する。 るなど、建国来の最大の 初めて外国による占領 筑紫) 危 機の 時に新法隆 が現実とな

構築に路線転換をするというメッセージ るのではなく、 確に尊崇する気持ちである事を豪族たち に周知させ、 倭国隆盛の立役者の厩戸を、 今後は大国の唐と事を構え 厩戸と同じく友好関係の 天智も 明

を鎮護国家の正に「救世」主として崇め 倭国の存亡の危機を脱するべく、 既戸

とであり、 像 玉 14 像は他に類例を見 0) これ 11 「避を祈願する。 が真の理 由 なの ないと言うこ 救世 かも 観 知れ 音菩

説を主張したい 教唆犯も含めて天智 したと入鹿単独説としてあるが、 とする梅原猛説も今思えば正解である。 を根絶やしにされた厩戸の の怨霊を法隆寺に押し込むためであった 謀殺され 書記では六四三 た厩戸 0) 年に入鹿が一 中大兄皇子) 族 霊を慰め 取り分け 族を討伐 私見は 主犯 子 7 孫

この三点が大きな狙 いであったと思う。

書記 編纂 者の聖徳太子像の創 作 0) 思

等は、 踏まえて、 子信仰の元型) 時には既に、 また始祖とも言うべき天智の隠され のである。 書記編纂の約 豪族たちへの迎合と納得性の獲得、 書記の そうした豪族たちの固定観念を の既戸一 豪族たちに厩戸礼讃 五 に編纂者の持統と藤原 イメージが定着してい + 年 族への鎮 前 0) 新法隆 魂 卡 (聖徳太 た陰謀 建 記の 不比 立 0)

要するに、 新法隆寺建立という建造物と たのであろう。

大政奉還後、

ひたすら恭順を守り続けた

我が国 あろう。 聖徳太子」 書記において最大級の賞賛を冠する 初 0) 歴史書 像の創作を行う事としたので 0) 記録との整合性を図る

蝦夷・入鹿親子を最大限の悪しき様に記録 する一方、蘇我氏の血を継いでいる厩戸 行ったとする虚飾をはじめとして、 と言った天武朝以降の新政策の一 ついては、 の三代、 聖人君主像を創作するのである 書記は、 取り分け天智の眼 冠位十二 蘇 我氏 一階や十七条憲法の制 前の敵であっ 部を既に 最大級 定

我氏

大王

明

年 0)

間 時代は、

であ

書記 天皇

記

宗家 の馬 子 蝦 夷 入鹿 えられ 当の違 意図が図らずも 蘇我氏系大王の時代の全体の文調の中で相 如何にも 録は淡々と簡潔に述べてい 推古天皇の約四十 太子の顕彰記 る。 和感があるのも 系の 後から追

録だけは詳細に書かれてあり

る。 るが

かし

加で挿る

入したかのような

て聖徳太子信仰が全国に浸透する事となる 0) 国史の記録が基になって、 いずれにしても、 纂 着の 長い年月を経 狙 63 通 り、

露出してし

まったからと考

編纂者

のこうした

自 11 由 を 執 筆 に

徳川

慶喜

が駿府に移り住

んだ慶

応

四年

九

1

日から

明治

元年)七月、

多くの

牧之 原 0 茶 袁

太 H 精

之原を緑の茶園に変えたのは 代までは 地である。 臣たちなのである。 は、それほど昔のことではない 牧之原は、 この 狐や狸の棲む荒野であった。 大井川 台地が、 河口の 緑 西岸に広がる台 の茶園となっ 帰農し 江 た旧 時 牧 た

> ある。 ちが 与えることは出来ない あ 家臣たちは、 天領、 た領地が、 江戸 徳川家は、 預り から 領 H 一駿府 々の暮ら 七十万石に減封され すべての家臣たちに禄を 旗本領を加えて七百 に居を移した そのため、 しにも困る状 たので 万 石

幕臣たちである。 そこで、一 その 中 核となっ 部 の家臣たちは、 精鋭隊は、 たの か 精 帰 野寛永寺に 鋭隊 農を決意 0) IH

変える

ことにし

大草

年

Ti

H

善

来

有

望な

商

品

になることを

説

13

将

ば 族 0) を L 共 4 7 L を Ш 放 麓に 慶 营 置すること 住 を たの h 7. 新 番 13 L か 組 た と名 出 か 水 F 来 窮 聚 乏す n 駿 府 を

され 91 0) 新 原 111 彼 危 番 尚 0) 6 鉄 険 組 治 ることに 11 な存 + 0) Fil 0) 新 を帰 など 地 徳 身 隊 政 + 111 0 在 府 なっ 農 四 0) 振 新 7 は あ n 政 0) 大 方に ても 意 領 X 府 7 ti た。 思 町 7. 乱 久能 0) 歩 あ 0 t, 0 そこで 温 親 あ 5 63 た金谷 7 3 交 Ш 約 床 とな 幕 相 0) 談し 臣 24 居 ŋ 原 勝 本 0 た。 F 0 IH か 構 海 1 牧 げ 幕 舟 ta えた 7 7 Z 渡 臣 to

か 章 2 勝 新 た B 器 油 組 舟 重 0) Ш 明 取 试 10/10 鉄 人とも は 舟 中 幕末 6 條 景 橋 泥 昭 0) 舟 1 舟 믦 親 とい 頭 交が M わ は h

7

11

たの

7.

あ

なっ 本であ 水 13 中 牛 條 る 秀 ま 秋 n た。 B 7 0) 文 1 i首 供 政 場で + Ш 0) 頃 /III 年 出 以 鉄 後 心 か T. 6 来 舟 形 八 武 葉]] 0) 武芸を 道 流 1 を学 場 佐 百 九 7 0 6 剣 坂 iT. HY 技 高 本 n Fi 六 伊 龍 を 弟 0) 磨 旗 番 馬 庭

術

授

後

将 3

軍

0 中

御 條

Hij

111

试 府

茶 茶

#

111 滴

0) す

111 7

根

裁 Ž 海

擅

3

0)

知

1:

2

あ

14

幕

劍

0) 新

栽 番

培 組

か

る

0) 原

14

な を

11 勧

か 80

と考

た。

7. 続

牧之

植

勝

舟

は

0) 13

作 年 徴 6 舟 事 13 組 あ 7 は 奉 0) 7 組 行 ZI. 太 御 格 P J) となっ 留 取 文 0) 亭 久 秘 縮 技 居 0) 7 支 支 な 63 配 配 14 露 組 3 頭 命 ぜ 旗 5 本 13 どの H n 身 慶 頭 1 使 応 族 63 御 79 新 手

学ん 射を 以 てい + 中 7. 0 0) は、 次男 来 る。 だ。 小 歳 AA は 旗 とし + 0) Ш 草 幕 原 畴 本 尚 馬 などと 天保六 14 接 府 0) 術 W. 7 右に 大草高· 夷 11 H 兵 後 衛 気 + 特 層 共に 骨 部 出 0) t 久美 あ A 0) 3 優 剣 克 組 8 開 n 槍 0) 3 法を 養 八 幕 浜 港 0) を 延 臣 政 は 子となっ 陣 西尾 とし 策に 結 元 な 射 屋 年 7. 成 63 61 7 L 反 2 旗 寛 和 対 知 本 ま Ĺ 八六 7 0) 郎 n 勝 5 わ nn n 中 13 騎 た

だら 栽培 た n 木 度 な 7 す 0) 新 L 4+ 酸 L してよ 大木に ま 性 組 0) 暌 地 0) 層 7. 隊 で降 育 あ n か 士 根 たな n 7 わ 63 0 か た 泥 6 帰 61 に層をない な 農 0) 0 雨 だ する ま は すぐに 13 牧之 地 L 8 F 7 L 0) 7 類 吸 原 層 13 L 13 は 7 は 8 込 何 か ま 樹 強 育 石 を

か

だ

が

慣 H は

n

な

労

働 Ħ

E

厳

L が か

13

生

活

耐 た 原

Z

台 勝

地 0)

幕臣

0)

家

族 動

植

L

助

人の心

を

牧之

0)

将 軍 家 とも あ

勝 た。 7 n 勝 は か な山 14 白 白 鳥 静 鳥 家に 林農 茶 尚 家 藩 か は 牧之原 家で、 作物 仮 0) 寓 藩 草 して 政 府 補 明 0 0) か + 翼 冶 13 5 山 たの ٤ 壌 X 11 年 を 白 適 0) 丰 閑 あ 口 鳥 0) H 家 膱 当 か 1. 0 あ 時 北 招

-)

0) 1)

景 府 3 た。 0) 輸 で、 決心 出 護衛をしたことがあ 0) 中 採茶 4 産 條 一時茶は をし 茶 品 大草 0) 使 7 栽培と製茶 あ ことに て宇治 たの 勝 糸 と並 0) 大草 る。 技 話 か 5 んで 術 を を 7 は 聞 見 御 H 0) 13 埶 聞 時 茶 若 7 本 茶 して 宇 心 壺 治 道 頃 東 重 0) 中 を 要 13 茶 る 作

た土 る家 き茶 農 平 ta 8 成 地 7 有 家 を守 0) が 族 0) は、 栽 今 脱 落す 自 培 0) まで、 開 を 0) 3 産 拓 地 者 满 旧 8 たな L 小 る 幕 て茶 て今も 袁 臣 牧 を 0) Z 購 園 先 なお 祖 原 を か 人 経 が か た。 営 開 引き 全国 拓 隣 7 L